

# 会 誌

第四十号

平成 20 年 1 2 月

大阪市立大学大学院医学研究科  
分子病態薬理学教室 同窓会

## 『 インタビュー 』

山本 研二郎

インターサイエンス社から突然電話があってHypertense-Scopeという雑誌に歴代の高血圧学会会長のインタビューの記事を載せているので、次回はよろしくとのこと。これには注文がついていて、女性のお弟子さんを質問者を選んで下さいとのことである。そこで国立循環器病センターの中村敏子博士（内科高血圧腎臓部門医長）に頼むことにした。今年1月14日大阪のロイヤルホテル松の間で、簡単な打ち合わせの後インタビューを受けることになった。お互い手の内はわかっているのですが、いささかヤラセの感じはあるが、以下はその時の記事です。

**中村** 本日は、いろいろなお話をお伺いできればと楽しみにしてまいりました。先生は大阪のお生まれとのことですが、幼少時代はどのように過ごされたのですか？

**山本** 私は、大阪の天王寺に生まれました。小学生の頃は、日本も平和な時代でした。4人兄弟の一番下で姉や兄とは年も離れていましたので、わりあいいたずら好きで、時計やラジオを分解してしまったり、歌舞伎の勧進帳を見ては弁慶の真似をしたり、四天王寺の境内でカエルを餌に亀を釣ってお坊さんに叱られたりしたことを覚えております。

中学校へ上がる頃には、日本は戦争体勢に入っていました。学校では厳しい軍事教練がありまして、大変でした。

**中村** そのような時代に、どういったきっかけで医学を志すことになったのでしょうか？

**山本** 私の周りには、医者はおろか理系の人はほとんどいなくて、文系ばかりでした。しかし私は、なんとなく化学でもやりたいと思って、旧制高等学校の理系を受験しました。ところが、見事に入学試験に落ちてしまいました。今日のように予備校などありませんし、浪人すると軍需工場で強制的に働かされる時代でした。ちょうどその頃、軍医を養成するための医学専門学校が大阪にもできたので受験をし、思いがけず医学の道に進む事になったのです。

**中村** 思いがけず医学の道に進まれた先生が、薬理の研究をはじめられたのはなぜですか？

**山本** 当時、卒業後は1年間のインターン制度があり、私は大阪市立桃山病院に行きました。桃山病院は市民病院であると同時に伝染病病院でもありましたから、今では見ることもない天然痘なども目の当たりにしました。

医師免許をとって大阪市大の内科に入りましたが、採血して検査をしてもデータのばらつきの大きいことが気になりました。今日では、臨床検査技師

など専門家が各検査を行います。が、当時は、かけだしの内科医がすべての検査を行っていました。安定したデータを得られない原因は、基礎の教育がしっかりしていないせいではないかと思って、もう一度基礎医学を勉強しようと薬理教室に入りました。

**中村** 薬理教室ではどのような研究をなさったのですか？

**山本** 当時の主任教授が自律神経と循環の研究をされていたので、私は自律神経遮断薬の糖代謝に対する影響を調べる事になりました。当時は、ブドウ糖の還元力を利用して血糖の定量をしていました。ところが、ここでもデータがばらつくので、何か良い方法はないかと様々な文献を調べたところ、アンスロンという新しい試薬を使えば比色定量できることがわかりました。けれども、当時、日本ではアンスロンを入手することはできませんでした。そこで今度は、有機化学の先生に相談し、この試薬を自分で合成することになりました。

アントラセンという化合物から合成し、糖と反応させると、きれいな濃緑色が出て、文献どおり糖がきちんと測れるようになったのです。これで当初の目的は達成できたわけですが、今度は欲が出て、このきれいな色素が何者かを調べたくなりました。カラムクロマトグラフィーを用い、いくつもの溶媒を使い試行錯誤を重ねた結果、真っ白なクロマトグラフの柱に、きれいに展開された緑・青・赤の色素が分離されたときは本当に感激しました。あまりのうれしさに、友人（治楽会の蛭間政和先生）に写真を撮ってもらい、あちこちに自慢して回りました。結局、この実験が私の学位論文になりました。研究の面白さを実感したのはこの時からです。

**中村** しばらく医学とは離れた研究をなさって、その後、また生物の研究に戻られたわけですね。

**山本** 有機化学の研究をもっと続けたいという気持ちもありましたが、このままでは医学からどんどん遠ざかってしまいます。やはり生物にベースをおいた研究をしようと考えました。研究室では、自分のやりたいテーマを自由に選ぶ事ができましたので、それでは腎臓をやろうということになりました。

**中村** 近年では、CKD（慢性腎臓病）が循環器病の危険因子として認識され、腎臓が重要視されるようになりましたが、当時はそれほど注目されていなかったのではないのでしょうか。なぜ、腎臓をお選びになられたのですか。

**山本** 腎臓という臓器は、海から陸に上がった生物の進化の過程が全て入っている非常に面白い臓器だと思います。糸球体で大量の血液を濾過し、そのほとんどを尿細管で再吸収するという効率の悪いことをしているのです。どうしてそういうことをしているのか、特に尿細管での再吸収に興味を抱きました。けれども、いきなり尿細管の研究をするには能力不足だと感じたので、循環と尿細管の橋渡しをする物質であるレニンの研究を始めました。当時すでに、レニンが傍糸球体細胞に存在し、血圧や血中ナトリウム濃度により分泌が調整されることはわかっていましたから、レニン分泌の調整の調節機序を探れば、循環と尿細管機能の両方がわかると思いました。

**中村** 現在ではレニン、血圧・循環に大きな影響を及ぼすレニン-アンジオテンシン (RA) 系の重要物質として広く研究されていますが、当時レニンの研究をなさっていた方は少なかったのではありませんか？

**山本** 当時、薬理の分野でレニンを研究していた人は、日本にはほとんどいませんでした。そこで1964年にArther J. Vander (当時: Michigan 大学) のところへ留学しました。1年間の短い間でしたが、他の研究室や大学へ行ったり、自由に過ごしていました。

1969年にVanderをはじめ、日米のレニン研究者が京都に集まり、レニン分泌に関する日米セミナーを開催しました。そのときに集まったメンバーが中心となり、1975年にレニン研究会を発足させることができました。

**中村** レニン研究会の活動を通して、高血圧を研究なさっているたくさんの先生方との交流が始まったわけですね。先生は、高血圧学会の発足にも携わっていらっしゃいますね。

**山本** 日本高血圧学会は、金子好宏先生 (当時: 横浜市立大学) や尾前照雄先生 (当時: 九州大学) が中心となり、10人の理事でスタートしました。ほとんどが臨床の先生でしたが、基礎からは、病理学の家森幸男先生 (当時: 島根医科大学) と私が参加しました。

**中村** 1985年第8回高血圧学会で先生が会長を務められた際には、当時大学院生だった私も、学会の手伝いをいたしました。思い出に残る学会です。

**山本** 当時は1会場制で、2日間に渡り開催しました。演題を50題に絞り、施設の規模に関わらず、1施設からは2題までの採用に限定しました。よほど完成度の高い研究でないと採用されませんし、学会当日は大勢が聞きに来て、発表後は質問者が列を作りましたので、当然、発表者には大きなプレッシャーがかかりました。また、臨床に比べて基礎の研究発表が多かった点からも、今の学会とはずいぶん雰囲気の違いでしたね。

**中村** 先生の研究室には、いつもたくさんの大学院生がいましたね。

**山本** 大学院生とは、一緒に野球やゴルフをしたり、夜は麻雀や飲みに行ったり、結構遊んでいましたね。それで大勢集まったのかもしれませんが。若い研究者は、大学院の時に他学部出身者と接触し、討論することがいい刺激になるだろうと思って、医学部だけでなく、理学部や薬学部、農学部、工学部出身の学生を積極的に受け入れました。

大学院修了後、多くの学者が、ドイツのDetlev Ganten, Thomas Unger (当時: とともにHeidelberg 大学)、フランスのJoël Ménard, Pierre Corvol (当時: 共にINSERM)、米国の稲上正 (Vanderbilt 大学)、Victor Dzau (当時: Harvard 大学)、オーストラリアのFrederick Mendelsohn (当時: Melbourne 大学) など世界各地の研究者の下へ留学し、それぞれ立派に成長して戻ってきました。

**中村** そうですね。先生の推薦で留学された方々が、現在、各地の大学の医学部や薬学部、企業の研究所、国公立病院などさまざまな職場で活躍なさっています。私も、フランスのストラスブールに留学いたしました。先生は、海外の研究者のご友人がたくさんいらっしゃるの、私達も留学先に恵まれ



たのだと思います。先生は、どのように交流を広げていらっしゃったのですか？

**山本** 海外の研究者と知り合うのは、やはり国際学会ですが、学会会場だけでは時間にも制限もあり、親しい話をするのは難しいので、学会後のミニシンポジウムなどが重要だったと思います。特にヨーロッパでは、古いお城や古い教会、ライン川の船上など印象深い会場でシンポジウムが開催される機会が多く、泊まりがけの小さい研究会では質問もしやすいので、自然と会話も増え、多くの友人ができました。また、大勢の研究者が我々の研究室を訪れ、講義をしてくれて。学部学生にとってもよい刺激になったと思います。

1988年の国際高血圧学会の際に私が担当したレニンのシンポジウムは、会場として京都の泉湧寺を使わせていただきましたが、海外の研究者には好評でした。

**中村** 降圧剤の変遷をご覧になっていて、印象深い出来事などはございますか？

**山本** 苦い経験がひとつあります。1977年に Ondetti らが初めて ACE 阻害薬 Captopril を発表したとき、ある製薬会社の研究所長から「このくらいの化合物なら、わが社の技術を使えば簡単に合成できるのだが、ACE 阻害薬としての将来性はあるのか」という質問を受けました。私は「血中レニン活性の高い腎血管狭窄性の高血圧には有効だろうが、症例数が少ないので使用は限られるのではないかと」答えてしまいました。当時、レニン活性は血中のものと考えていたのです。私の発言がどの程度影響したのかわかりませんが、その製薬会社は研究を中断して、数年後に開発を再開しましたが、結局市場には出ませんでした。

やはり、薬の効果というものは、実際患者に投与してみないと判断できないということを感じていました。

**中村** まだ、組織 RA 系という概念がなかった頃のお話ですね。最後に、長年に渡り、薬理学の研究をなさってきた先生にとって降圧薬とはどのようなものなのでしょうか。

**山本** 研究者の立場によって考え方や探究法は違います。薬理学の大切な仕事のひとつとして、生体内で起こっているさまざまな反応、生理的な機能を研究することがあります。降圧薬は臨床ではもちろん治療薬ですが、われわれの分野では、生体機能を解明していくためのツールとして降圧薬を研究に用いることが多いのです。そういった研究が、新たな治療や新薬の可能性へとつながってくるのでしょうね。

臨床から得られるデータは特に重要ですが、さまざまな立場の研究から得られたデータを集積することで、はじめて薬の全体像がつかめるのだと思います。

ところで、この頃は、私自身が朝型の高血圧で、ARB や ACE 阻害薬のお世話になっています。

**中村** これからも、ますますお元気でお過ごしください。本日は、貴重なお

話をお伺いできました。ありがとうございました。

## 『 60の手伝い 』

山本 研二郎

今年の7月からまた絵をはじめました。「また」というのは30年ほど前に少々デッサンをならって、そのあと見よう見まねで油絵をはじめたのですが1年たらずでギブアップしたまま、もっぱら鑑賞を楽しむ事にしていました。今年の夏に倉庫を整理してしましたら昔の描きさしのキャンバスや古い筆が出てきて、もう一度挑戦してみようと決心した次第です。

都合の良いことに、声のきれいな独身の女性画家、といっても私より年上ですが、すぐ近所におられて、御自宅でも教えておられるし、堺のよみうり文化センターでも絵画教室を開いておられます。一念発起、今年の7月から第2-第4水曜の午後、油絵教室の生徒になりました。男性6人、女性8人、いずれも高齢で男性はお互いの前歴を知りません。女性は元気で、結構にぎやか、私は一番新参者ですでおとなしくしています。先生は若い頃「安井賞」を受賞され、今も現役で各種の展覧会の審査員をしておられます。

文化センターの生徒になるのは実は2回目で、20年程前、梅田でマジック教室へ通った事がありますが、3ヶ月程でやめました。マジックは一人で楽しんででも下らないし、誰かびっくりしてくれる人が必要です。どんなに好人物でも3回同じものを見せられると褒め言葉につまるので気の毒です。絵は下手は下手なりに楽しんだり、苦しんだり、次は、次の次はどのテーマにしようかと楽しみが膨らみます。

水曜日の午後1時に教室に集まります。かなり広くて、14-15人がばらばらにイーゼルを立ててもゆったりしています。道具は預けられるので往復は手ぶらでよいのですが、家でも描く人はキャンバスだけ持ち運びしています。3時半までの2時間半、かなり長く感じますが、先生はこの間に一巡して、絵の前に座って直して下さるのですが、折角苦勞して描いたところを平気で跡形もなく塗りつぶされます。何と失礼な、と思うのですが、10分程度手直しされると、ゆがんでいた屋根が真っ直ぐになったり、山や森が立体的になったり、とにかく様子が一変します。以前おられた女性の生徒さんで、先生が例のごとく手直しされると手足をバタつかせて「止めてー」と大声で叫び声を上げた人がいたそうです。その気持ちよく理解できますが、プロとアマの差なのですね。私も現役時代に大学院生や研究生の学会発表の原稿を無惨に手直しした経験がありますので、プロとアマの差に一人で苦笑いしているところです。

このところ会う人ごとに「油絵をはじめている」と宣伝しています。10人に一人くらいしか何を描いているのか尋ねてくれませんので、ここで作品の

紹介をしたいと思います。数年前ブダペストで買った民族衣装をまとった人形をモデルに第1作を描きました。顔が大きすぎて、何ともバランスが悪く、目つきも良くなく、何回も描き直しましたが、その度に先生に大幅に手を入れられ、やっとこの辺りかというところで筆を描きました。まだサインはしておりませんが、金縁の額に入れると「馬子にも衣装」で一寸良く見えます。写真に撮って見せ廻っています。第2作はスペインのサンチャゴで撮った風車の並んでいる風景です。陽当たりの具合が良いので意気込んでいたのですが、小屋よりも風車そのものを何度も手直しされ、その度に背景の空も描き直すので大変です。8号キャンバスの右下が開きすぎて間が抜けたので、幻想的に馬に跨ったドンキホーテを描き加えました。男の生徒さんがこれを見て「面白いですね。しかしちょっと馬の尻が大きすぎますね」「そうですね」そこは油絵の自由なところで、少し縮めました。すると別の生徒さんが「この馬、首がながいですな」「そりゃそうですよ。尻を切ったからね」首から前をすこし工夫して何とか馬の形になりました。キャンバスを家へ持って帰ると今度は家内が「馬の割に人が大きいね」こんなに云われてはドンキホーテも立つ瀬がないですが、この作品は額に入れて現在我が家の玄関に飾ってあります。2ヶ月もなるのに訪問客は誰人も何も云ってくれません。そのうち気が向けばドンキホーテの亡霊に手を加えようと思っています。

第3の作品はハイデルベルグの郊外ケーニッヒシュタインに建つゾンネンホッフを描いています。これはかつてユダヤの大富豪ロスチャイルド家の別荘で、第2次大戦後、民間のホテルになっています。かつての主人の間に泊まった事があるのですが、豪華すぎて落ち着かなかった事を覚えております。写真を頼りに描いているのですが、先生に何度も手直しされています。駐車場の手前の樹と向こう側の樹が思うようにならず、まだ8分程の出来上がりです。4番目は以前より狙っていた興福寺の阿修羅像を描きはじめています。三面六臂の立像は形そのものが面白いのですが、バランスが難しそうなので腰から上だけにしようと思っていましたところ、先日興福寺の国宝展に行きましたら、丁度恰好の写真を見つけました。少年のような瑞々しさと、一寸眉根を寄せた暗い臙脂色のふくよかなお顔、細長い6本の腕、この冬の宿題にしようと思っています。

先日ロータリーの例会で隣に座った人と絵の話をしていましたら「私はもう油絵は卒業しました。一つアドバイスするとしたら、油絵は絵の具を吝嗇らん事です」何と芸術性のない言葉！！と思っていましたが、「素人芸の一面をうまく云いあてているな」とこの頃、感心しています。来年も絵の具を吝嗇らず、先生に無茶苦茶に描き直されても穏やかな顔を作って描き続けようと思っている年末です。

## 『 治楽会はなんと読むの？ 』

岩尾 洋

先輩方から教わった読み方はゴウラクカイとコウラクカイの二通りあり、圧倒的に多いのがゴウラクカイで、私も長年ゴウラクカイと思っておりました。また治楽会の治はさんずい（ㄣ）ではなくて、にすい（ㄣ）だという話も聞きました。本当はどれが正しいのでしょうか。少々調べてみました。字源や漢和辞典を調べましたが、にすい（ㄣ）の字はありませんでした。また、治はコウの読み方しか出ておりませんでした。

昭和48年12月発行の治楽会会誌（薬理学教室同窓会誌）に上田重郎先生の書かれた記事の一節に謂れと読み方が載っています。これほど確かなものは無いので転載いたします。

「治楽会会誌の創刊号に私の略歴を記しましたが、その中に私は、私が薬理学の道をえらびどうにか一人立ちできるようになったのは大沢勝、寺沢源雄両先生のご指導によることを記しました。この大沢先生の同門会は治樹会、寺沢先生の同門会は亦楽会といいます。治樹の「治」はウルオス、アマネシの意でコウと読みます。治和、治歆などの語があります。亦楽は説明するまでもないと思います。この二つの会はいつも和気あいあいとやっています。そこでこれにあやかり更に慾ばって治楽とつづけました。私自身「和」を生活信条の一つにして来ましたが治楽という語はそれにピッタリだと思っております。今日迄この治楽会はその名の通りの会であり益々発展してきたことは会員各位の努力によるもので感謝にたえません。」

蛇足ですが、今年の2008年8月に開催されました北京五輪開会式で「有朋自遠方来 不亦楽乎（ともあり、遠方より来る また 楽しからずや）」の論語の一説が唱えられました。

上田先生も願っておられましたように、これからも和気あいあいと治楽会が続けられればと考えております。皆様のご参加をお待ちしております。

### ベルリンの国際高血圧学会

今年の6月中旬にドイツのベルリンで第22回国際高血圧学会が D. Ganten 先生を会長として開催されました。Ganten 先生は F. Gross 教授の下でハイデルベルグ大学の薬理学教室で長年にわたりレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の研究をされてきました。特に、脳内のレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系があることを初めて明らかにされた人です。1989年のベルリンの壁崩壊後、1990年の東西ドイツ統合後に旧東ドイツのベルリン郊外にあった MaxDelbrück 研究所の所長として移動されました。研究所の名前の由来は1969年にノーベル賞をウィルスの遺伝のメカニズムの研究で受賞したマックス・デルブリュック先生から来ております。1996年に私は Ganten 先生の研究所を訪問しました。その折 Ganten 先生のお部屋でマックス・デルブリュック先生のノーベル賞の賞状を見せて頂きました。



研究所の玄関に飾るつもりだと言っておられました。MaxDelbruck 研究所に 1 週間ほどお邪魔してレニンを強制的に発現させたトランスジェニック・ラットの仕事をしにいました。1996 年当時のベルリンは旧東ドイツの面影がかなり残っていました。ベルリン市内から MaxDelbruck 研究所に国鉄 (DB) で移動すると、旧東ドイツの建物群がよく見えます。西ベルリン側から見えるところは綺麗に壁が塗られていましたが、一歩中に入ると薄汚れて、窓ガラスが割れていました。全体的な色合いは灰色で暗い感じがしました。また、プラカードを持って飛行場に出迎えに来てくれた運転手は東ドイツ出身ですから英語は話せません。私のドイツ語は大学の教養で学んだことがあるというだけで役に立ちません。研究所の近くのターミナル駅はひどく閑散として寂しい場所で、どここの場所の標識を見てもドイツ語だけで、もちろん合う人たちは英語は通じませんでした。僅かに研究所の医師だけが英語を理解してくれました。

Ganten 先生は MaxDelbruck 研究所の所長からさらに偉くなり旧東ドイツのフンボルト大学、ベルリン自由大学などを統合した Charite-University Medicine Berlin シャリティー大学学長に就任されています。T. Unger 先生はシャリティー大学の薬理の教授です。

Ganten 先生は山本研二郎先生の古くからの友人で、会誌にも何回か登場した方です。皆様の中にも覚えておられる方も多いと思います。我々の関係者の中でも雪村時人先生、太田健介先生、伊藤勝彦先生が西ドイツに留学され、二人は Ganten 先生の居られたハイデルベルグへ、もう一人は Ganten 先生の弟子の T. Unger 先生のところへ留学されました。

約 10 年ぶりのベルリンです。

人々の表情が明るく、町全体も明るく活気が感じられるようになりました。夜間でも以前に比べて安全のように感じました。市内中央部のベルリンの壁の跡を見ても、約 20 年弱前に東西ドイツを分かち壁が存在したことが嘘の様でまったく分かりません。ただ列車に乗り旧東ドイツにあった博物館周辺には面影が残っておりますが、現在も 2015 年の完成に向け大規模な改造改修工事が行われております。

学会期間中 7 月 18 日の一夜、午後 8 時半から夜中の 12 時までベルリンの美術館・博物館が集っている所の博物館島の旧博物館、新博物館、旧国立美術館、ボーデ博物館、ペルガモン博物館が学会参加者に解放されました。もちろん有料で 60 ユーロです。現在の為替相場は 1 ユーロが 120 円程度ですが、この時期の相場は 180 円程度でした。建物の外に軽食が準備されワインを片手に雑談をして、満ち足りた気分になってから優雅に勧奨できるように Ganten 先生が配慮されたのではないかと思います。でも、館内で思わぬ知人に合ったりしたら、近況を互いに話し合い、次には研究の話へと自然になり、ついつい長話をして、気がつく残り時間が少なくなっています。巨大な美術館・博物館を全部開放しているわけではありませんので、本当に有名なところを美術館・博物館でそれぞれの選んで見せていただきました。訪

れた方もおられると思いますが、紀元前2世紀の古都ペルガモンの大祭壇は圧巻でした。

電車で30分ほどのベルリン郊外にポツダムの町があります。日本にとってはあまり面白くない響きの場所です。この町のツェツィリエンホーフ宮殿において対独戦争の勝利国の米国（トルーマン大統領）、イギリス（チャーチル首相）、ソ連（スターリン）の首脳が集りポツダム宣言が作られた所です。元々はベルリンの近郊に位置することからプロイセン王国（1701－1918年）の離宮が多く存在したところでした。湖と公園が散在し、公園の中に宮殿が点在しており、散策するにはとても良いところで、自転車を借りてサイクリングをすれば更に楽しめる町です。ドイツの国鉄には自転車を乗せるスペースがありますので、階段を物ともせず自転車を担ぎ上げている人たちが結構います。昔、ハイデルベルグに滞在したときに自転車を借りて走っていました。車も人もほとんど居ない自転車道路を日本と同じようにのんびりとペダルを漕いで走っていると、突然に反対車線を自転車で走っていた人に声を掛けられ、早口で何やら話しかけられました。何が何やら分からずにボカーンとしていると、どうやら叱られている様だと分かりましたが、何を叱られているかがはっきりしません。しばらく聞いてみると、私は自転車で反対車線を走っていたようです。ドイツでは自転車は右側通行を義務付けているのかと分かりましたが、何事も理詰めで厳格な、しかもお節介な人たちがいるものだと感心しました。

#### 日本薬理学会年会を主催予定

2010年3月16日－18日に第83回日本薬理学会年会を主催いたしますこととなりました。昭和44年12月に上田重郎先生が第43回日本薬理学会総会を主催されてから約40年ぶりのこととなります。当時は大学紛争の時期であり全国の大学が動乱の時期で、とても学会が無事に出来るかどうか不安定な状況中で山本先生はじめ教室の諸先輩方が一丸となり学会を無事に行うことが出来たと伺っております。今回は、昨今の米国に端を発した経済金融危機が進行中ではありますが、大学は独立行政法人化し少し元気があります。そんな中、薬理学教室の面々は元気に研究に励んでおり、年会では薬理学会を盛り上げようと考えております。学会期間中に同窓会の皆様も時間の余裕がございましたら、ちょっと覗いてみてください。

## 「はじめまして」

川本由貴子 杉原舞有子

2008年4月より、大阪市立大学大学院・医学研究科・修士として、薬理学教室でお世話になっております、川本由貴子・杉原舞有子でございます。

はや9ヶ月がたとうとしていますが、まだまだ半人前で先生方にご迷惑をおかけするばかりです。常々、自身の勉強不足を申し訳なく思うと共に、根気よくご指導いただき、心から感謝しております。

残すところ、あと1年と数ヶ月ではありますが、先生方の期待に答えられるよう日々努力し、成長していきたいと思っております。

それでは、お互いに他己紹介をしてみたいと思います。

まず、写真（右）の川本さんを紹介！！

### 川本由貴子とは

キャッチフレーズ：KYなデストロイヤー（KY：イニシャル）

通称：ゆっこ

出身大学：大阪薬科大学 有機合成

ラグビー部 マネージャー

臨床開発職に携わりたい一心で大阪市立大学へ

生息地：寝屋川市駅 徒歩7分

攻撃力 ★★★★★ 破壊力抜群

デストロイヤー（壊した物は数知れず）

防御力 ★☆☆☆☆ 胃腸が弱い

口ぐせ：お腹すいた

ラッキーアイテム：するめ、プチシリーズ（黒こしょう）

幸せそうな瞬間：ごはんまたはお菓子を食べている時

こんなユッコですが、

意志が強く、1度決めたことはやり通します！

記：杉原

つづきまして、写真（左）の杉原さんを紹介！！

### 杉原舞有子とは

キャッチフレーズ：食物アレルギー＋偏食 ⇒エネルギー不足

通称：すぎちゃん

出身大学：武庫川女子大学 薬学部 薬理

赤血球チーム

研究開発職に就きたい一心で大阪市立大学へ

生息地：初芝駅 自転車7分

免疫力 ★★★★★ 卵・牛乳・牛肉・鶏肉に過剰反応

自由度 ★★★★★ ふわふわしています

口ぐせ：にゃあ（うつります）

ラッキーアイテム：水、うすーいお茶

幸せそうな瞬間：“源 吉兆庵”の水ようかんを食べている時

こんな杉ちゃんですが、

没頭すると、すさまじい力を発揮します！

記：川本

個性の強い2人ですが、どうぞ、よろしくお願い致します。



現在、私たち2人は、研究のかたわら、就職活動に励んでおります。製薬業界を中心に活動しており、川本は臨床開発職、杉原は研究開発職を志望しています。

製薬企業にお勤めの方で、お力をお貸しくださる方がいらっしゃいましたら、ご一報頂けますでしょうか。何卒よろしくお願い申し上げます。

## 一言近況報告（敬称略）

6月28日（土）に、銀座アスター難波賓館にて、洽楽会の小宴を開催しました。

御案内葉書に添えた一言近況報告にご返信いただいたものをここに掲載します。

皆様、お忙しい中、ありがとうございました。

- ・ 市川 富夫  
すべての仕事を終了しての生活です。何かとすることがあるようでないです。
- ・ 伊藤 勝彦  
今、超小型ミニブタを作っています。
- ・ 今西 政仁  
この4月から腎臓・高血圧内科を標榜できました。
- ・ 太田垣 京子  
おかげ様で、健康に気をつけて趣味にボランティアに励んでおります。
- ・ 岡田 美代子  
薬理でお仕事させていただいたころは若かったなー、と懐かしく思い出しております。教室のご発展をお祈り申し上げます。
- ・ 日下部 裕美  
東京の生活にも慣れ、研修にテストに飲み会に日々頑張っています。
- ・ 久保田 宏子  
元気で古希を迎えました。
- ・ 杉本 弘  
右膝の化膿性関節炎のため体調崩しております。
- ・ 立本 泰祥  
忙しい中でも、充実した日々を過ごしています。

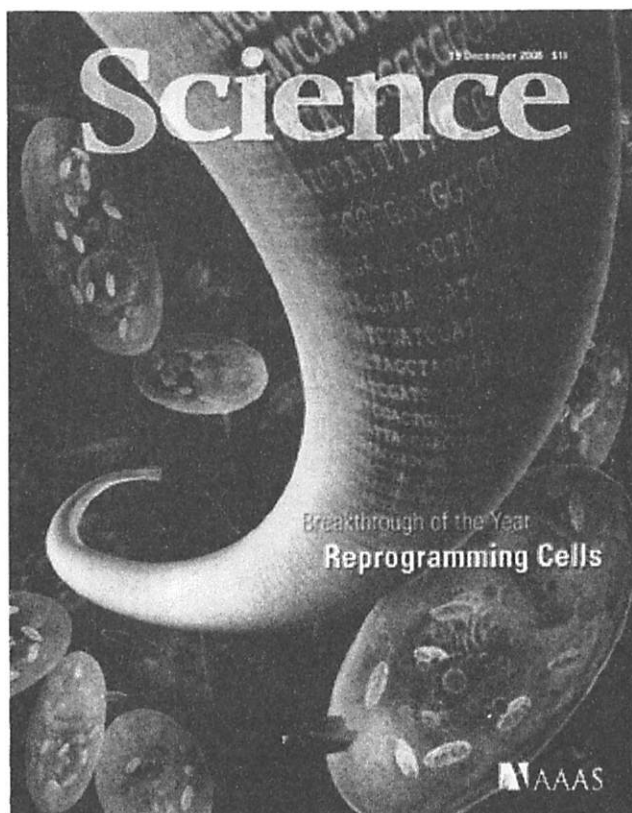


- ・ 徳山 恵子  
医薬分業もスムーズになりました。長女もこの4月より社会人としてスタート！子供の自立と反対に親の介護がいろいろと大変です。
- ・ 萩原 善行  
元気でやっております。
- ・ 引田 優子  
研修が終わり、いよいよ配属です。厳しく温かい上司のもとで、毎日楽しく仕事をしています。
- ・ 細井 雅之  
自治体病院も崩壊です。
- ・ 細木 和  
無理をせず過ごしています。
- ・ 松島 成夫  
閉院しています。 最近胃腸の調子が悪いため失礼いたします。
- ・ 松村 靖夫  
薬学教育の新制度に振り回される毎日です。
- ・ 行友 正裕  
元気で暮らしています。

## 平成 20 年 今年の出来事

- ・ 3 月に日下部裕美さん、疋田優子さんが大学院修士課程を修了し、日下部さんは興和創薬に、疋田さんは塩野義製薬に就職しました。
- ・ 4 月に武庫川女子大学薬学部出身の杉原舞有子さん、大阪薬科大学出身の川本由貴子さんが大学院修士課程に入学しました。
- ・ 7 月 19 日に塩田正之先生がメタボリックシンドローム学会で 2 回目の奨励賞を受賞しました。
- ・ 9 月から田中昌子さんが実験補助員として参加してくれています。
- ・ 11 月 3 日に皆様既に新聞でご存知と思いますが山中伸弥先生が紫綬褒章を受章されました。大変嬉しく名誉なことで心よりお祝いを申し上げます。
- ・ 10 月に松原知子さんが退職され、松本珠子さんが新しい教室秘書に来られました。

・ 12 月 19 日 Science 誌に 2008 年の science of the year の発表があり山中伸弥先生のヒト人工多能性幹 (iPS) 細胞を応用した研究が選ばれました。Science 誌の Web に入ると Video: Reprogramming Cells が出てきますので一度ご覧になってください。「This video introduction to Science's year-end special issue features Shinya Yamanaka of Kyoto University, George Daley of Harvard University, and Science's Gretchen Vogel reviewing some of the work that led studies in reprogramming cells to be tagged the top scientific story for 2008.」



## 第16回 大阪市大フォーラム

2008年8月1日（金）に毎年恒例の夏の研究会を、大阪市立大学医学部学舎6階中講義室2におきまして開催いたしました。

発表演題が9題に特別講演、そして活発な質疑応答。

皆様のお陰を持ちまして盛会となりました。

時節柄ご多忙の折、また酷暑のなか、遠路、本当にありがとうございました。

### \*\*\*プログラム\*\*\*

#### 開会の辞

1. 13:10-13:30  
座長 塩田正之  
演者 富田修平（徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部薬理学）  
演題 腎臓再還流障害における低酸素応答転写因子の分子機能解析の試み
2. 13:30-13:50  
座長 富田修平  
演者 山形雅代（大阪大谷大学薬学部臨床薬理学）  
演題 腎障害の進展とメガリンの関係について
3. 13:50-14:10  
座長 山形雅代  
演者 清水佐紀（大阪薬科大学薬品作用解析学）  
演題 抗精神病薬による錐体外路系運動障害に対する5-HT<sub>1A</sub>作動薬の作用解析
4. 14:10-14:30  
座長 清水佐紀  
演者 森本陽香（関西学院大学理工学部生命科学科）  
演題 酸化ストレス応答因子 Nrf2 の調節機構について
5. 14:30-14:50  
座長 森本陽香  
演者 善田直樹（大阪薬科大学病体分子薬理学）  
演題 腎虚血再灌流障害における性差に eNOS は関与しない
6. 14:50-15:10  
座長 善田直樹  
演者 大黒亜美（関西学院大学理工学部生命科学科）

- 演題 EET 加水分解酵素 (she) の細胞増殖における役割について
7. 15:30-15:50  
座長 大黒亜美  
演者 石原 静 (大阪薬科大学薬品作用解析学)  
演題 電位依存性 Na<sup>+</sup>チャネル Scn1a 変異ラットのけいれん発現感受性評価
8. 15:50-16:10  
座長 石原 静  
演者 松本千佳 (大阪薬科大学病態分子薬理学)  
演題 間歇的低酸素曝露による左室リモデリングの発症・進展におけるキマーゼの役割と重要性
9. 16:10-16:30  
座長 松本千佳  
演者 劉 鋼 (香川大学医学部薬理学)  
演題 High sodium augments angiotensin II-induced proliferation of rat vascular smooth muscle cells through an ERK1/2-dependent pathway.
10. 16:40-17:30 特別講演  
座長 泉 康雄  
演者 泉家康宏 (熊本大学医学部薬学研究部 循環器病態学)  
演題 Akt1-mediated skeletal muscle growth reduces fat mass and improves metabolic parameters in obese mice.
- 開会の辞

\*\*\*御出席者名簿 (敬称略、順不同)\*\*\*

※当日、受付にて御記帳いただいた方を掲載しております。

☆大阪大谷大学 臨床薬理学講座

雪村時人 筒井秀伸 山形雅代

☆大阪薬科大学 病態分子薬理研究室

松村 靖夫 太井健詞 大喜多守 大西香菜子 北田研人  
木村公洋 小淵修平 鈴木理恵 善田直樹 瀧井雄基 田中  
亮輔  
玉置浩子 西村友里 長谷川健一 平田智子 福本大起 松  
本千佳  
村澤志保 山下直人 山中理紗 山本真也 由井 希 吉岡  
敏孝

☆大阪薬科大学 薬品作用解析学研究室

石原 静 今奥琢士 今木淳太 大野行弘 河合悦子 菊田未希

清水佐紀 寺田 亮 村上賢次 森下恵理  
 ☆大阪薬科大学 薬品物理学研究室  
 文沙俣  
 ☆香川大学 形態・機能医学講座 薬理学  
 西山 成 藤澤良香 劉 鋼 中野大今  
 ☆関西学院大学 生命科学科  
 今岡 進 大黒亜美 森本洋香  
 ☆熊本大学 循環器病態学  
 泉家康宏  
 ☆滋賀医科大学  
 岡村富夫 田和正志  
 ☆徳島大学 ヘルスバイオサイエンス研究部薬理学  
 石澤啓介 今村優子 玉置俊晃 富田修平 トルツリ・ナリトリガ'ラカ'  
 福原弥生 山口邦久  
 ☆大阪市立大学大学院医学研究科 薬効安全性教室  
 三浦克之 北本興一郎  
 ☆大阪市立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学  
 岩尾 洋 泉 康雄 中尾隆文 塩田正之 川本由貴子 杉原舞有子

## 論文発表

1. Nakao, T., Geddis, A.E., Fox, N.E., and Kaushansky, K.  
PI3K/Akt/FOXO3a pathway contributes to thrombopoietin-induced proliferation of primary megakaryocytes in vitro and in vivo via modulation of p27(Kip1).  
*Cell Cycle.*, 7: 257-266.
2. Toyo-oka K, Mori D, Yano Y, Shiota M, Iwao H, Goto H, Inagaki M, Hiraiwa N, Muramatsu M, Wynshaw-Boris A, Yoshiki A, Hirotsune S. Protein phosphatase 4 catalytic subunit regulates Cdk1 activity and microtubule organization via NDEL1 dephosphorylation. *J Cell Biol* 6:1133-1147, 2008.
3. Yoshikawa T, Akiyoshi Y, Susumu T, Tokado H, Fukuzaki K, Nagata R, Samukawa K, Iwao H, Kito G. Ginsenoside Rb1 reduces neurodegeneration in the peri-infarct area of a thromboembolic stroke model in non-human primates. *J Pharmacol Sci* 107:32-40, 2008.
4. Shiota M, Kusakabe H, Hikita Y, Nakao T, Izumi Y, Iwao H. Molecular network analysis in pleiotropic effects of statin. *J Pharmacol Sci* 107:15-19, 2008.
5. Tanaka F, Tominaga K, Shiota M, Ochi M, Kuwamura H, Tanigawa T, Watanabe T, Fujiwara Y, Oshitani N, Higuchi K, Iwao H, Arakawa T. Interleukin-10 gene transfer to peritoneal mesothelial cells suppresses peritoneal dissemination of gastric cancer cells due to a persistently high concentration in the peritoneal cavity. *Cancer Gene Ther* 15:51-59, 2008.
6. Iwai T, Kitamoto K, Teramoto K, Machida Y, Tamada S, Yukimura T, Iwao H, Nakatani T, Miura K. Cobalt Protoporphyrin Attenuates Rat Obstructive Nephropathy: Role of Cellular Infiltration. *Urology* 72:432-438, 2008.
7. Teramoto K, Negoro N, Kitamoto K, Iwai T, Iwao H, Okamura M, Miura K. Microarray analysis of glomerular gene expression in murine lupus nephritis. *J Pharmacol Sci* 106:56-67, 2008.

学会発表

泉康雄、佐野元昭、塩田正之、中尾隆文、岩尾洋  
Ménage-à-trois 1 は心筋代謝機能の維持に重要である  
第 37 回日本心脈管作動物質学会 (2008 年 2 月 2 日 仙台)

日下部裕美、塩田正之、疋田優子、泉康雄、中尾隆文、三浦克之、岩尾洋  
HSP70 は Akt の活性を抑制し、血管新生に関与する  
第 81 回日本薬理学会年会 (2008 年 3 月 17-19 日)

疋田優子、塩田正之、日下部裕美、泉康雄、岩尾洋  
プラバスタチン依存的 FGF-2 発現は血管新生に関与する  
第 81 回日本薬理学会年会 (2008 年 3 月 17-19 日)

泉康雄、佐野元昭、Schneider MD、岩尾洋  
Loss of ménage-à-trois 1 in cardiomyocytes causes mitochondrial dysfunction  
第 72 回日本循環器学会学術集会 (2008 年 3 月 28 日-30 日 福岡)

Iwao H, Kusakabe H, Shiota M, Hikita Y, Nakao T, Izumi Y.  
HSP70 plays a critical role in angiogenesis  
第 22 回国際高血圧学会議 (ISH) (2008 年 6 月 14-19 日 ベルリン)

泉康雄、塩田正之、中尾隆文、三浦克之、Schneider MD、岩尾洋  
心臓における ménage-à-trois 1 (MAT1) の役割  
第 113 回日本薬理学会近畿部会 (2008 年 6 月 20 日 岡山)

泉康雄、塩田正之、中尾隆文、岩尾洋  
カニクイザルを用いたタコツボ心筋症モデル作成とメトプロロールの効果  
第 31 回日本高血圧学会総会 (2008 年 10 月 9-11 日 札幌)

塩田正之、泉康雄、川本由貴子、中尾隆文、岩尾洋  
プラバスタチンによる内皮細胞遊走とその機序の解析  
第 114 回日本薬理学会近畿部会 (2008 年 11 月 14 日 神戸)

塩田正之、泉康雄、中尾隆文、岩尾洋  
Hsc70 (Hsp ファミリー) の内皮機能における役割  
第 18 回日本循環薬理学会 (2008 年 11 月 21 日 千葉)



上野由香子、南畝晋平、岡本洋、藤尾慈、竹本恭彦、葭山稔、寺崎文生、大塚薫、岩尾洋、東純一

心不全治療における $\beta$ 遮断薬反応性の個人差とThrombospondin1遺伝子多型との関連

第29回 日本臨床薬理学会年会（2008年12月、東京）

松本恭尚、南畝晋平、岡本洋、藤尾慈、竹本恭彦、葭山稔、寺崎文生、大塚薫、岩尾洋、東純一

Complement component4 遺伝子コピー数多型と拡張型心筋症による心不全治療における $\beta$ 遮断薬反応性個人差との関連

第29回 日本臨床薬理学会年会（2008年12月、東京）

## 編集後記

今年の11月より薬理学教室にて医局秘書としてお世話になっております松本 珠子と申します。慣れない事ばかりで先生方をはじめ多くの方々に助けて貰いながら日々過ごしております。皆様、これからどうぞよろしくお願い致します。

会誌が年内にお届けする事が出来ましてほっとしております。

2009年が皆様にとりまして幸多い年でありますようにお祈り申し上げます。

## 編集後記の後記

治楽会誌の作成に四苦八苦しています。22日は塩田先生に手伝っていただき住所録が完成しました。明日は休みなので明後日に完成し、発送が出来れば万々歳です。